

## 巻 頭 言

水谷信子先生が、今年3月をかぎりにお茶の水女子大学を退官された。

この論文集は、先生から親しく教えを受けた者たちが感謝の気持ちをあらわすために編纂されたものである。

企画は1年前の春にたてられた。1994年6月に開かれたお茶の水女子大学日本語文化学会で提案、了承され、研究会誌『言語文化と日本語教育』第9号として発刊することにして、長友和彦教授を中心に編集の準備に入った。呼びかけにこたえて多くの論文が寄せられた。しかしページ数を制限したために、寄稿を断念した方や、意をつくせなかった方にはお詫びもうしあげる以外にない。

水谷先生がお茶の水女子大学に勤務されたのは1986年からであったから、在職期間は9年であった。その間の業績の数々は有形のもの無形のもの問わず、計りがたく大きい。

着任と同時に開設された、副専攻の日本語教育基礎コースの充実に努力され、同時に外国人留学生のための教育や学内の受入れ態勢をととのえることに力をつくされた。1991年には大学院修士課程に日本語文化専攻を設置することが決定したが、4月22日の入学式にいたるまでの長い準備期間はご苦労の連続であった。その後、お茶の水女子大学日本語文化学会を発足させ、お茶の水女子大学の学内にとどまらず、ひろく後進の研究指導や教育にあたってこられた。

研究や教育に関する業績などについては、巻末の資料にくわしいので、ここではくりかえさない。

退官という語感には終了という響きをともなうが、水谷先生にかぎっては一つのステップに過ぎず、これからも暗夜の灯台のように高い目標となってわれわれを励まし、行く先を示しつづけてくださるにちがいない。

いっそうのご研究とご健康をお祈りして論文集の献呈の辞とする次第である。

1995年7月1日

『言語文化と日本語教育』編集委員会代表  
お茶の水女子大学教授

平田悦朗